

シニア便り 号外
故 佐藤友則氏 追悼号

(二〇〇四年九月発行)
発行 北海道シニア吹奏楽団事務局
編集 『シニア便り』編集部

北海道シニア吹奏楽団創生期の主要メンバーであり、平成十年十月より六年余りにわたり事務局長として団の運営に貢献されてきた佐藤友則さんが、去る五月十三日に突然亡くなられました。このことは、私達団員に大きな驚きと深い悲しみをもたらしました。この号外では、団員有志から寄せていただいた佐藤さんへの追悼の言葉を紹介いたします。

『弔辞』

佐藤さん、今こうして貴君の遺影の前に立ちお別れの言葉を申し述べなければならぬ現実を私にとりも認めるわけには参りません。一昨日の突然の訃報、ただただ驚愕し呆然とするばかりでした。

奥様を始めご家族皆様の悲しみと嘆き、お察しするに余りありおなぐさめすることはありません。運命の残酷さ、これ以上のものであるでしょうか。貴君は平成五年七月北海道に新しいユニークな吹奏楽団を作ろうという趣旨に賛同して設立に参画し、以来十一年、数多くを達成した団を今や四十数名の規模を誇る吹奏楽団に育て上げる原動力として尽力されました。

トランペット奏者として活躍されること

もに、豊富な経験と優れた事務処理能力を発揮され、長年にわたり団の事務局長として多くの業績を挙げられたことは団員一同が等しく尊敬し感謝しているところであります。

昨年無事に十周年の記念演奏会を終え、これからさらに大きく飛躍しようとしている今、貴君を失ったことは団にとって大きな痛手であり、痛恨の極みです。

毎月一回の団の懇親会には必ず顔を見せ、音楽や団の将来についてお酒を飲みながら深夜まで語り合ったことも、また私個人としてはスコアにこだわらないおらかなゴルフを数多く一緒に楽しんだことも今は悲しい思い出になってしまいました。

しかし私たちがその悲しみを乗り越え、貴君が残してくれた業績を受け継ぎ、団の発展のためにみんなが努力していくのが、運命に報いるものだと思います。

佐藤さん、どうか安らかに眠りください。そして天国から私たちの活動を自守り、私たちの演奏を聴いてください。

平成十六年五月十六日

北海道シニア吹奏楽団

中村 暁 生

『弔電』

佐藤さん、我々団員は今、驚きと悲しみの中にいます。十一年目を迎えた我団になくはない事務局長である佐藤さんが亡くなったとは信じられません。

団の為、団員の為、貴君を惜みます。尽力頂いたことに尊敬と感謝の気持ちでいっぱいです。これから我々は佐藤さんの遺志を受け継ぎ、更なる向上の為努力してゆく所存です。

どうかその姿を自守っていて下さい。そして天国からトランペットで合奏に参加して下さい。

最後に、もう一度飲み明かしたかったです。ただ、ただ、ご冥福をお祈り申し上げます。

北海道シニア吹奏楽団 団員一同

※ 文面は久光宏樹さんより提供していただきました。

『風と共に去りぬ』

渡辺 順 三

第一回定演を終えた平成六年春、北海道大学吹奏楽部OB会の席上で、林団長、前谷さん、私の三人が、盛んにシニアのコーナーを繰り返しておりました。何人かは耳を傾けてくれましたがどうでしょう。自らの人生に確かな手応えを感じながらも、メインステージの終盤に差し掛かっていた熱年の諸先輩にとって、永いフランクを承知で楽器に再挑戦するのは、並大抵のことではないはず。しかし、まさか……いたんですよ。

佐藤さんが、入団理由は「ニコニコしながら一言「やりたい」。楽譜ケースの中から、カビ臭さをまれいに拭き取ったラップと、佐藤少年の夢が一緒に飛び出しました。それからの佐藤さんは、人知れず、日夜必死に練習に励んだことと思います。

第五回定演終了後の平成十年十月、二代目の事務局長に就任した佐藤さんのその後の活躍は、皆さん承知の通りです。定演の準備は言うに及ばず、団員の提案を取りまとめ毎月の呑み会、シニア便りを正規の活動に取り入れるなど、今日のシニア隆盛の基礎を固めた佐藤さんの功績は、誰もが認めるどころ

です。何より当時の佐藤さんは、団員みんなから慕われる存在でした。しかし、第九回、十回の定演あたりから、少し様子が変わって来ました。俺がシニアを背負っているんだ」という頼もしい姿勢がマイナスに連鎖し、団員からたびたび指摘されるようになってきました。私にも、強方にバックアップしていかなくなったという反省点があり、今でも申し訳なく、残念で残念でなりません。

お酒と豆腐ステーキに目の無い佐藤さんとは、すいぶん楽しく酒を酌み交わしました。朝までやりました。激しい言い争いもすいぶんやりました。最後にふたりで呑んだのは、今年の二月九日グランド居酒屋富士でした。「あんたとは、もう二度と呑まない」。そう言う佐藤さんの目は三角でした。隣のお客があわてて帰り、店の人が何事かと出てきましたよね。でもその後、其の面目に二軒回ってやっぱ朝でしたわ。

佐藤さんは、この十年で少年を演じ、好々翁を地で演じ、慣れない敵役までも演じて、風と共に去りぬでしたわ。風じゃありません、あの散らかりようは、風ですよ。佐藤さん亡き後の事務局長を継いでみて、佐藤さんは、団長の信任も厚い、立派な事務局長でした。ひとりで、どんなにか大変だったでしょう。結局、佐藤さんは、全団員の一致協力がいかに大切かを、身をもって教えてくれたんだというね。

第十一回定演も、もう間近です。悲しさを乗り越えてみんなで準備をしておりませう。どうか成功を自守して下さい。シニアの将来を佐藤さんはどう描いていたのでしょうか。佐藤さん、呑みたいね、ふたりで……。

『佐藤さんと豆腐』

吉田和夫

佐藤さんとの出会いは、シニアがそもそもである。シニアは、いろいろな経歴の持主の集りである。それ故に夫々の人となりを知ることや親睦を図ることが必要であることから誰ともなしに呑み会が盛況された。もう六七年は経過したのだろうか。三年程前から毎月の当番も決まり定期的に開催される様になった。この恒例行事は、プログラム等でシニアの特徴として紹介もされている。

呑み会の当初は、区単位の当番制として各区の居酒屋を訪ね歩いたこともあった。参加者は多くて七、八人、三、四人のこともあった。佐藤さんは、必ず参加するという律儀な人であった。話題のほとんどは、シニアに関すること議論にまで発展したことがあったが（以下略）、酒の肴は、夫々が自分の好みを申し出ることとしていた。佐藤さんは、必ず豆腐料理を注文していた。豆腐料理といっても、冷奴、揚出し豆腐、豆腐ステーキと品数が限定されている。佐藤さんは、夏冬問わず冷奴で「体にいいから」と一言付け加えるのが常であった。次いで豆腐ステーキが得意であった。佐藤さんは、本当に豆腐が大好きで日本酒を好む大人（たいじん）であった。この毎月の呑み会は、人となりを知ることや親睦を図る上で大いに効果を挙げていると………。これからも、楽しく愉快なシニアを維持するために、創意工夫を凝らした呑み会が続くことを佐藤さんも願っているのではないかと思ふ。

今夏は、佐藤さんの新盆を迎えた。さる処で冷奴と日本酒を嗜みながら、シニアの練習

を見守っているのではないのでしょうか。

「豆腐福を祈るのみ。」

合掌

『佐藤さんへの思い』

阿部 勝・薫

沢山ありすぎて、ひときりでは言えないことに、今さらながら気がついていきます。

「どこでも行くよ」と言ってくれて

苫小牧で夜中まで飲んだこと。役員会では、どんなに文句を言われても「まあ、まあ」って笑顔でいたこと。（笑）

気がつくとき、何故かとなりには佐藤さん。合奏中のカウントと「あれ！あれですよう」がもう聞けないのは淋しいですね。（涙）

でも、ひよっこり顔を出しそうな、そんな気がします。

『佐藤さんとの思い出』

鈴木 健一

佐藤さんと私の出会いは二〇〇二年に北海道で行われたミニ・コンサートでお会いしたのが初めてです。佐藤さんから話し掛けられ「北海道出身」「トランペットを吹いている」ということなどをお聞きしました。その後、昨年のシニア吹奏楽団の定期演奏会でお手伝いを依頼され一緒に演奏をしました。

昨年、佐藤さんを通してライオンズクラブから留学生派遣のお話があり、北海道から一名参加させていただきました。ライオンズクラブでこの留学生の会談の後、事故に遭わ

れました。今でも亡くなった事が信じられませんが。

今年の三月に二人でお酒を飲む機会があり、そのときに昔の北海道の様子をユーモアたっぷりに教えていただきました。その後キクヤ楽器の延寿さんも父と三人で明け方まで一緒に居ました。夕方に紳士で常に目じりのしわが印象的なあの笑顔は忘れられません。天国でゆつくりとお休みください。

『今想う佐藤さんの人となり』

高橋 章子

私が、シニア吹奏楽団に深く想いを寄せることが出来るひとつの理由として、佐藤事務局長の補佐として次長の役職をいただき、微力ながら事務局にかかわりを持たせていただいたという事があります。

佐藤さんと一緒に酒を飲みながら話しているうちに、ある時ふと「演奏ではなかなかついて行けなくて足を引っ張っているけれども、事務局を一生懸命手伝うことによりシニアに対する想いも変わっていくのかもしれない」と考える様になりました。それまでは、団員とあまり話もせずシニアに深く関わり合う事も考えていなかったのですが、今ではどうぶりとハマってしまいました。佐藤さんのあの適当な「じゃなくてグロバルなところ」に惹かれてハマってしまっただけでしょうか。思いつくのはいつもお酒を片手に「そんな事はアレさ、もつとグロバルにね、そういうことさ……」話を聞いてもらおうと何か言つと、「まあまあ、いっしょそんなの、アレでしょ」と楽しそうに飲んでいました。

今もそのドアから佐藤さんが入ってきてくれます。今日もある人がママさんに聞いています。「佐藤さん来てない？」

『遺志を受け継いで』

近藤 学

私が北海道シニア吹奏楽団のことを知ったのは、北海道の鈴木先生を通して佐藤さんや団のことを紹介していただいたのが最初です。初めて練習を見学した折は二コ二コと迎えて下さり、入団してからも何かと親切にしてくださいました。恒例の呑み会の席でも、同じ大学のOBというよしみもあって、いろいろな話に花を咲かせたものでした。そう言えば、佐藤さんは『シニア便り』のことを詳しく説明してくれて、「原稿を執筆してほしい」とおっしゃっていた気がします。その時は、機会があればという程度にしか考えていませんでした。私が編集の担当を仰せつかることも、ましてや当の佐藤さんが亡くなられるなど全く思いもよりませんでした。今こうしてパソコンに向かって、佐藤さんを偲ぶ追悼の号外を執筆・編集しているという現実を、複雑な思いで受け止めています。佐藤さん、短い間でしたが、お世話になり本当にありがとうございました。これからは、佐藤さんと同じトランペット・パートの一員として、また『シニア便り』の編集担当として、微力ながら力を尽くしてまいりたいと思っています。そのことが、佐藤さんのこれまでの団に対する貢献とその遺志に報いる私なりの方法ではないかと思ふからです。この追悼号を、謹んで佐藤さんに捧げます。